

マラマッド作品と伝記的要素の関連性

奈良県立医科大学医学部看護学科

勝井伸子

Works of Malamud and Biographical Factors

Nobuko Katsui

Nara Medical University Faculty of Nursing

要 旨

常に社会において周縁化された人物を描いてきたユダヤ系アメリカ作家、バーナード・マラマッド (Bernard Malamud 1914—1986) の伝記は長く書かれなかった。作家自身が作家の実人生と作品との関わりを最小にしようとした意味で、世紀末を風靡した文学研究者の主張である「作者の死」を実践した作家とも言える。マラマッド自身はユダヤ性よりもアメリカ人として成長したと強調し、批評家は作家の意図通り類型的な東欧からの貧しいユダヤ移民がアメリカ文化の中で成長したマラマッド像をイメージした。しかし、フィリップ・ディビスによる『バーナード・マラマッド—ある作家の生』によれば、少年マラマッドはブルックリンのユダヤ系アメリカ人社会の中にさえ「所属」する場所を確保できず、統合失調を発症して自殺未遂を図り、2年後精神病院内で自殺した母の自殺未遂場面を発見するという傷を負っていた。マラマッドが周縁化された人物の第二のやり直しの機会をしばしばテーマとして描いたのは、彼がまさに個人的な背景から必要としたものである。例として『新しい生活』を分析してみるとマラマッドの主張通りアメリカ文学伝統の中に紛れもなく存在する作品であると同時に、伝記の記述による裏付け作業によって初めて解読できる部分もあることがわかる。ディビスの仕事は、今後のマラマッドの作品研究の上で大きな意味があると思われる。

キーワード：伝記・バーナード・マラマッド・アメリカ

1. 作家と伝記的要素

アメリカ文学研究では、初期より、作者の実人生のテキスト解釈への関わり・役割への否定的論調が顕著であったと言われてきた。この傾向を端的に表現したデブラ・モデルモグ (Debra A. Modellmog) によれば、二十世紀半ばに隆盛を誇ったニュー・クリティシ

ズムによる「方法論的・実際的理由から作者のアイデンティティを無視した」(12) アプローチに明確な形として現れ、1990年代に入って、ロラン・バルト、ミシェル・フーコーらの「作者の死」の宣言で作者とテキストとのつながりは完全に否定されたという。この現象をモデルモグは、「周縁化されていた

者の出番がきた時、支配者はそれまでのゲームをご破算にしてルールをかえる」(13)と表現した。ここでいう「周縁化されていた者」とは、マイノリティ作家、女性作家など、文化の主流から遠ざけられていた人々である。そして、「支配者」とは、文化の主流にいる白人男性作家を指している。常に社会において周縁化された人物を描いてきたユダヤ系アメリカ作家、バーナード・マラマッド(Bernard Malamud 1914—1986)の伝記が、「作者の死」の時代において、長く書かれることがなかったことは、こうした文学研究の傾向と無関係ではないかもしれない。

マラマッドの伝記が書かれなかった理由には、こうした「作者」への文学研究の関心の変化に加えて、作家自身の生前の有り様とも関係しているかもしれない。生前より、自分の個人的プロフィールを語ることは極端に少なく、同じユダヤ系作家でありながら、自身の生と性の有り様を作為的に露出するフィリップ・ロス(Philip Roth 1933—)とは対照的な作家であったマラマッドについて、作品解釈に伝記的要素を持ち込むことは、そもそもかなり困難な作業であった。その結果、ユダヤ的であるとか、アメリカ的であるといった、漠然としたジャンル分けに終始することが多かったとも言える。

むしろ、マラマッド自身が作家の実人生と作品との関わりを最小にとどめようとした意味で「作者の死」をある意味で実践した作家と言えるかもしれない。その理由のひとつには、彼の作風にあると考えられる。彼の作品には、「周縁化された人物を描く」という通底するモチーフがあるようであり、常に題材、年代、場所、テーマが変わり、連作短編を除くと、同じ時代、同じ設定を用いること

がなかった。野球小説、ブルックリンのつぶれかけた商店、西部の大学、末期帝政ロシアでのえん罪事件、ニューヨークの白人と黒人作家同士の凄惨な対決、中年を迎えた伝記作家の執筆の苦しみと情事、核戦争後に生き残ったたった一人の男と類人猿たちといったように、最晩年まで、変貌しつづけたこの作家は、読者の期待をある意味で裏切り続け、一つのカテゴリーに収まることを拒否し続けたと捉えることもできる。

マラマッドと「作者の死」を関連づけるもうひとつの理由として、少なくとも、ユダヤ的伝統を受け継ぐ作家というジャンル分けに対し、マラマッド自身が積極的に歓迎していなかったこと、彼の生育歴については、漠然とブルックリン育ちの貧しいが愛情深い商店主の子という印象以外は与えなかったことが、彼があまりひきうけたがらなかったと言われるインタビューの内容からも容易に推し量れることが上げられる。1974年にダニエル・スターン(Daniel Stern)が行ったインタビューで、マラマッドは、ユダヤ系アメリカ作家であるということについて、次のように答えている。

私はアメリカ人であり、ユダヤ人であり、すべての人間に対して書いている。(中略)私はユダヤ人について書く。私の想像力が働くからだ。その歴史や、経験の質、文学(伝統)について知っている。満足するほど十分にではないが。多くの作家と同様に聖書に特に影響を受けている、旧約にも新約にも。両親の世代の東欧の移民に特に反応する。(中略)ときに登場人物をユダヤ人にするのは、よく知っているからであって、

何かを証明するためではない。(中略) 作家としては、(ユダヤ系作家よりも) 私はホーソーン、ジェイムズ、マーク・トゥエイン、ヘミングウェイらに影響を受けてきた。(中略) 私が言いたいことは、私はアメリカに生まれ、ユダヤ的経験よりはアメリカンライフに反応してきたということだ(63-4)。

ここでマラマッドが言っていることは、ユダヤ人世界で育ったので、自分がよく知っているユダヤ人を描いたとしても、それはユダヤ性をことさら強調するものではなく、たまたまユダヤ系であるアメリカ人として成長してきたからであるということであろう。このように、マラマッドはユダヤ系であることと自己の作品との関連を最小にとどめようという意図を明白にしている。

さらに、伝記的要素の排除へのマラマッドの意図はかなり徹底している。同じスターンのインタビューにおいて、彼は自分の生い立ちを次のように語っている。

私はプライバシーを好み、自分の本の中にもできるだけ持ち込まないようにしている。それがあつた種の正当な文学批評において不利益になることは承知しているが、しかし私自身のニーズのほうを優先している。私自身について、すこしばかりお話ししよう。父は商店主で、母は父を手伝っていたが、長い病の後、若くして死んだ。弟が一人いるが、厳しく孤独な人生の後、五十代で死んだ。母も父も優しく、正直で、親切な人間だった。彼らの人柄や私への愛情が文化的欠乏を有る程度補ってくれた(55)。

ここから具体的にわかることは極めて少なく、マラマッドは自分の生い立ちについて、具体的に語っているようで、実は何も語っていないのだ。わかることは家族構成、それぞれの死んだ時期しかない。そして、マラマッドが、文学批評の点から、不利益を被ることを承知の上であえて語らなかったことは何か、マラマッド批評がそれを読み解くことはなかったと言っていいだろう。批評家はマラマッドが意図した通り、東欧からの貧しいユダヤ移民であり、二十世紀のアメリカ文化の中で成長した作家としてのマラマッド像をイメージするほかなかったのだ。このようにきわめて類型的な東欧ユダヤ人としての出自とアメリカで育ったことだけを強調し、マラマッド個人の要素を巧みに消してしまうことによって、マラマッドは意図的に「作者の死」を実践しようとしたとも言えるのではないか。

言い換えると、マラマッドは、個人の伝記的要素を排除し、変貌し続けることによってアメリカ作家としてのペルソナを求めたとも言える。ロブ・ウィルソン (Rob Wilson) が述べるように、「白人男性が定めたアメリカの使命を具体的に表現し、(中略) アメリカの生き方の美德、自由、そして進むべき道を確認するものである」(171) ことがアメリカの伝記では重要であることを、マラマッドは十分に意識していたのではないか。自己の歴史を具体的に語らず、自己=アメリカ人という定義だけを主張することによって、「アメリカ人の男」としての自己像を強調し、そして利用した、という推察も成り立つのではないか。そうした視点に立つと、マラマッドの作品に「新しい」解釈をほどこすことも可能かもしれない。

その解釈行為において、おそらく生前マラマッドが予想していなかったかもしれないあるテキストが大きな役割を果たすことになる。それこそが、マラマッドの伝記である。作品から作者を消すことはできない、という認識は、「作者の死」を書いたバルト自身によって、「伝記素」として改めて再認識された。しかし、同時に、バルト自身「伝記素」と名づけたものは断片であり、つくりものの想起記述以外の何物でもないとしたように、伝記が文学テキストの解釈を決定する根拠であるとは言えない。マラマッド自身、伝記作家の中年の危機を描いた傑作『ドゥービン氏の冬』(*Dubin's Lives*, 1979)で主人公に語らせているように、伝記を書くという行為は「幻想の上に幻想を重ね」(26) ることである。

「知るという行為はそれ自体いわば神秘的な行為」(26) であり、糸をほぐしてその糸を「織物」にしていくとき、「そのとき用いるある色のついた言葉のために、どうしても」伝記作家の「人生の色がついてしまう—主観的な色がついてしまうのを避ける方法はない」(26) ののである。「過去は伝説を生む。泥にも似た時間を素材にまじりもののない土をつくるというのは無理な話だ。過去の人間の人生を、完全にそのままとらえることなどできるものではない。ということは、伝記はすべて究極においてフィクションだということである」(26—7) という主人公の言葉は、そのままマラマッド自身の伝記観であると推測できる。しかし、たとえ主観的な色がついた織物であろうと、その糸は、作家の伝記素であることに違いはないのだ。そして、われわれが文学テキストを解釈するときには、色がついている可能性を認識した上で、その糸をわれわれの織物に織り込

んでみることにしかないのではないか。

2007年、死後実に二十年余りを経て初めて家族以外の第三者によるマラマッドの伝記が出たわけであるが、それはある衝撃を持って受け止められる内容を含んでいた。フィリップ・ディビス(Philip Davis)による『バーナード・マラマッド—ある作家の生』(*Bernard Malamud: A Writer's Life*, 2007)がアメリカではなくイギリスの出版社から出たこと、マラマッドの初版を出版し続けたファーラー・ストラウス&ジロー社ではなくオックスフォード大学出版局からであったことは、その衝撃的内容からして当然とも言えるが、シルヴィア・プラス(Sylvia Plath 1932—1963)の『ベル・ジャー』(*The Bell Jar*, 1963)がアメリカではなくイギリスで最初に出版されたことを連想させるものである。マラマッドと生前交流があった、アメリカのバーナード・マラマッド協会の会長であるイヴリン・アヴェリー(Evelyn Avery)はこの伝記について「心をかき乱す内容である」と筆者に感想を述べた。しかし、ディビスが遺族関係者の全面的許可を得て、非公開であった諸資料に全面的にアクセスして書かれたこの伝記は、マラマッドの人生と作品を糸とした大きな織物に織り上げられ、今後のマラマッド作品研究の上で欠かすことのできない資料として残ることは間違いないだろう。

2. アメリカ文学伝統の中の『新しい生活』

この作品では、上司のギリリーの妻ポーリーン(Pauline)との情事、姦通、あるいは愛が大きな役割を果たすわけだが、その意味でしばしばホーソン(Nathaniel Hawthorne 1804—64)の『緋文字』(*The Scarlet Letter*,

1850)の影響が論じられる。作品中でも、『緋文字』の姦通の相手であるディムズデイルの名が、レヴィンの森の中の彷徨の際に現れることから、マラマッドがインタビューで語ったようにホーソーンを意識していたことは明らかであろう。ポール・ウィザリントン(Paul Witherington)も指摘しているように、ポーリーンとレヴィンの森の中の上首尾とは言えない情事を、ヘスター(Hester)とディムズデイル(Dimmesdale)の森の中での出会いと重ねることはきわめて自然であるように思われる。

清教徒時代の17世紀植民地における厳しい性道徳と、保守的な50年代の表向きの性道徳には、共通性があると見て良いだろう。50年代のアメリカは経済的繁栄を誇ったが、女性は家庭の中で夫を支えるために存在すると考えられており、結婚制度が女性の生き方を厳しく抑制していたことは間違いない。

この別々の時代の二組の男女に共通するところは多い。ヘスターとチリングワースの間には大きな年齢差があるのと同様に、ポーリーンとギリーにもやはり大きな年齢差がある。職業として、チリングワースは医師、ギリーは大学教授であり、主任教授という重職についていることから、知的専門職者であるだけでなく、コミュニティにおける地位も高いと考えられる。『緋文字』のピューリタンの禁欲的価値観に満ちたコミュニティの閉鎖性と、『新しい生活』における、共産党狩り(=赤狩り)がさかんに大学で行われた50年代における西部地方の新設大学というコミュニティの閉鎖性には、個人の行動がコミュニティにより監視され、場合によっては処罰され、追放されるという共通点が見られる。レヴィンは大学での人文学の復

活を目指して、最後には学部長選に立候補するという無謀な賭にでるわけだが、そうしたレヴィンの闘いを、ウィザリントンはメルヴィル(Herman Melville, 1819-91)のエイハブ(Ahab)の敵意に満ちた世界を象徴する白鯨に対する闘いとも重ねている。こうして、アメリカ文学固有の伝統の中で、この作品を読むという視点も興味深い示唆を与える。前述したように、マラマッドがアメリカ文学から大きく影響を受けてきたと述べていることを跡づけていることになろう。

あまり問題として取り上げられることがないが、上司ギリーがカメラで写して言う言葉「とったぞ」の意味は何なのか、という点が、『緋文字』との比較において意味を持つ可能性について言及したい。ギリーの勝ち誇った言葉は、寝取られた夫であるチリングワース(Chillingworth)が、姦通の罪に苦悩するディムズデイルの胸に何らかの姦通の罪のしるしを目撃した(と信じた)ときの表現と非常に近いのである。チリングワースは眠っているディムズデイルの「今まで常に着物でおおって医師の目にさえみせなかった」(167)胸のしるしを目撃し、ついに証拠を手にしたと思ったとき、「驚愕と喜びと恐怖の、狂わしいまでに現れた顔色」、「ものすごい狂喜」(167)を全身で表すが、この喜びとギリーの言葉を重ねると、姦通を目撃した(と信じている)寝取られた男の執念という意味で読むことができる。しかも、チリングワースが見たらしいしるしがどんなものであったかについて、ホーソーンが一切具体的に記述していないことと、写真とは、微妙な重なりを見せるのである。ホーソーン自身写真に関心を抱き、作品内にも持ち込んでいたことは知られている。ギリーは写真マニアであり、

妻の姦通を知りつつ、それを写真にとって証拠としていた。だが、皮肉なことに彼は写真が必ずしも本物を見せているとは限らないという認識を語るのである。「写真というものは見たままが写るものと思っている。ところが現像してみると、本物はもっとちがっていたのに気がつく」(352)すでにギリ自身も、写真が「真実」を「写して」いるわけではないことを、自ら述べているのである。

このギリの言葉は、写真について語るバルトの言葉と興味深い一致を見せる。バルトは『明るい部屋—写真についての覚書』において、亡き母の写真を見る作業を通して、写真が彼の母の本質を写してはいないという認識に至る。

私は母を終始断片的に再認・認識しているにすぎなかった。ということは母の実体をとらえそこなっているということであり、したがって母のすべてをとらえてはいないということである。(79)

ここから考えられることは、ギリがとった写真の証拠はチリングワースが見たと「信じた」罪の印同様、「真実」を「写した」ものとは言えないという可能性である。ギリの一次的勝利は、チリングワースの狂喜に似て、姦通の証拠を探し求める寝取られた男の執念から生じた「印象」にすぎなかったかもしれない、何かを証明したことにはならないということを示唆するのではないのだろうか。

3. レヴィンの探求

次に、結局レヴィンは何を得て、何を失ったのか、彼がかつてアル中であり、泥棒の息子であることはどういう意味を持つのか、マ

ラマッドの二度目の機会というおなじみのテーマはどういう意味を持つのか、さらに、何故上司の妻、明らかに精神的に不安定で何人も愛人のいた女性とその子連れで行くのか、という未解決の問題について考えてみよう。レヴィンは当初みずから「秩序、価値、達成、愛」(175)を求めて西部へ来たと言っている。これは、レヴィンがそうしたものを東部で手に入れていなかったことを示唆していることは間違いない。ここで、バルトのいう「伝記素」を読みに取り入れてみると、より具体的に、レヴィンに欠けていたものが見えてくるのではないか。

フィリップ・ディビスによるマラマッドの伝記『バーナード・マラマッド—ある作家の生』のなかで、秩序についてマラマッドが一種強迫的な執着を抱いていたことが語られる。「マラマッドは時間にとりつかれた人間であり、いつも時間に遅れているという感じを抱き、追いつかなければという思いにかられていた。常に秩序のもたらす正気の確実性を必要としていた」(6)。ここで、時間と秩序とが強く結びついていたことがわかる。そして、この強迫的執着がどこから生じているのかを、この伝記は示唆する。この伝記において初めて、母親が統合失調症であったことをあきらかにしている。さらに後に生まれた唯一の生存した弟ユージーン(Eugene)も、後に統合失調症を発症していた。マラマッドが少年のころ、母親が友達と一緒に映画につれていってくれると約束しながら、いつまでもいつまでも出てこず結局連れていってくれなかったというようなことが繰り返され、マラマッドは母をあてにすることができなかったのだ。三回の出産が産後うつ病を引き起こしたのかもしれないとマラマッドは考

えていた。少年マラマッドは歩行が困難で太った母を恥じていた。体重 200 ポンドの母が帽子を傾けて足を引きずりながら、通りを曲がりくねって歩く姿を恥じていた (5)。母が車に乗ったとき、車が (体重のために) 傾いたことを近所の女の子が口にしたことが少年マラマッドにとっては忘れられない記憶となった (5)。第一子の死産の後、マラマッドが生まれたわけだが、その出産が母の歩行に何らかの障害をもたらしたのではとマラマッドは考えていた。ゆっくりと母の精神的崩壊が始まったが、弟ユージーンが幼いうちは、母としての役割は果たしていた。しかし、ユージーンに対する母の養育態度は異常なまでに過保護であった。ユージーンは服の着脱、添い寝を 5, 6 歳まで続け、「5, 6 歳まで哺乳瓶を与えておき、すでにそのことを知っている隣人たちの笑い者になっていた」(5)。子ども達の清潔さについては強迫観念的であったものの、家事 (家族生活) は悪化していった (6)。こうした母親の世話の欠如、母親の存在への恥と罪悪感、母親の狂気への恐怖が、時間と秩序によって正気を保とうとするマラマッドの執着の原因であることは容易に推察できる。伝記はこうした少年時代の喪失と欠如が、長く (心の) 傷となって残ったことを指摘している (6)。こうした少年時代の喪失は、第二の機会へ、あたらしい生への希求へと、言い換えれば「秩序、価値、達成、愛」の探究へとマラマッドを駆り立てる一因となったと容易に想像できる。レヴィンがアル中であった過去を持つこと、泥棒の息子であったことは、言い換えれば、精神性のもろさへの恐怖、生育期への恥と喪失感をあらわしていると考えられることは、あながち見当違いではないだろう。

こうした少年時代は、マラマッドがユダヤ系アメリカ人としてのアイデンティティを確立することも許さなかった。母親はマラマッドがまだ 12 歳のときに消毒薬で自殺を図り、それを発見したのがマラマッドであった。この母の自殺未遂場面は、後年の小説『ドゥービン氏の冬』第二章に現れる。このとき、彼女は自分の自殺未遂について、「ウィリー、パパには私の頭がおかしくなったって言わないでね」(80)と言い、主人公は「ママ、それは言わないで」(80)と答える痛ましい場面が回想として描かれるが、ディビスの伝記によると、草稿では少年がまだバーミツヴァアもすませていないと訴えるせりふが存在していた。実際、マラマッドの人生において 13 歳で行われるユダヤ人の男性にとって最も重要な成人となる儀式であるバーミツヴァアは、社会的に認知される形では行われなかったことを伝記は語っている (8)。

父マックス・マラマッド (Max Malamud) は、息子を愛していたが、自らは社会主義者で無神論者であり、シナゴークにも所属していなかったことから、息子には自分で決めさせたいと思っていたこと、経営する店の経済状況がかんばしくないことからお金のかかるバーミツヴァアまで用意できなかったことなどが、後のマラマッドの人格形成には多いに影響を与えたものと考えられる。バーミツヴァアには前もってヘブライ語の学習など、少年マラマッド自身にもさまざまな準備が必要であるが、それも十分には受けられなかったのだ。ディビスは、このことについて「父マックスは無神論者であったが、バーナードにとっては「自由」の問題ではなく『所属』の問題だった」(8)と述べている。事実マラマッドにとっては、これは自由とは感じられ

なかったのだ。彼は近所の洋服屋を営んでいる少年と、自分のユダヤ人としての微妙な立場を考えて慎重につきあわざるを得なかった。少年マラマッドは、一人前のユダヤ人の男として、儀式の上で認知され、祝われる、明白に定義された生得の権利を得る最後の機会を失ったわけだ(9)。マックスが自宅ですてくれたバーミツヴァには、参列者の集う華やかな儀式もなく、贈り物もなく、お菓子やワインもなかった。その代わりに、彼はあやふやで、部分的にしか形成されていない成人期を強いられたわけである。

不完全は成人への移行と、キッチンの床に自殺未遂で倒れている母を発見したことは、その後のマラマッドの人間形成に深く影響を与えたと言えるだろう。2年後彼女が死んだとき、マックスはどのようにしてそれが起きたのか、彼には告げなかった。後年マラマッドは病院へ行って医療記録から死因を捜し、おそらく自殺であったらうという推論に達しただけであった。ディビスは、マラマッドに与えた母の最後の影響について、「母の中には、健全ならざる生まれつきの本能の絶望的な影響の持続があり、息子の中には知識と責任の未熟な傷があった。彼の後半生のあやうさはここにある。渇きと飢えの力強くからみあう言葉、魔法の欲求、あるいは少なくとも二度目のチャンス」(7)への希求があると指摘している。ここでディビスが言う責任とは、残された家族、すなわち父と後に統合失調症を発症する弟への責任であると考えるのが自然であろう。こうした人格形成期の経験は、マラマッドの作品の人物の中にある飢え・損なわれた少年時代を救済してくれる魔法的体験への欲求・人生をやりなおす第二の機会のテーマのもとになる経験となっ

たと考えるのが、最も適切であるように思われる。ディビスは「まともな生活を送っている自由な男になることは反逆的な危険を冒し、それに伴う痛みと孤独を感じることを意味していた」(7)と述べている。傷つけられた少年時代の人格形成を、再び形成し直すためには、人生をやりなおす第二の機会が必要であった。その過程においてマラマッドが経験したであろう、産みの苦しみに似た痛み、当然与えられるはずだったものが与えられなかった喪失の叫び、まさにアメリカ人としてもユダヤ人としても周縁的な存在である孤独感が、マラマッド文学の中心に存在することのひとつの解釈の道となるのではないか。

マラマッドが自己について語るものが少なく、自己をアメリカ文化のもとで育った作家であると主張したことは、マラマッドの少年時代に起きたことを考えると、納得できるではないか。幸い、アメリカ文化伝統には、アメリカでの新しい生、やりなおす人生という太い糸が織り込まれている。その糸はまた、マラマッドがまさに個人的な背景から必要としたものでもあるのだ。優れた能力は持っていない、少年マラマッドはブルックリンのユダヤ系アメリカ人社会の中にさえ「所属」できなかったのだ。マラマッドが周縁的人物にこだわる理由は、彼のこうした背景を見ると、その必然性がより強いものとして見えるのである。

4. 『新しい生活』における女性像—ポーリー—

前述したように、ポーリーはレヴィンにとって許されない女性、上司の妻であり、その関係は姦通である。それ以外に、ポーリー

ンには興味深い性質がある。それは、自分にいる環境に満足できず、自分自身にも満足できないという点である。これは、閉塞感の強い50年代のアメリカ白人社会に置かれた女性に一般的に共通すると考えることも可能ではあるが、マラマッドの伝記を参照しながら読むと、ポーリーンの存在は別の意味を帯びて来るのである。

寝取られた夫ギリーが語るポーリーン像は興味深い特徴がある。ギリーよりも良い家柄の出身の彼女は「生まれつきの不満屋」(352)であり、「いつも満足することなく、もっとうまくできたはず」(352)と言う。「今より、もっと立派な人間になりたい」(353)と望みながら、「うまくいった話は何一つ聞かない」(353)うえに、「自分で自分を神経衰弱に仕立ててしまう。」(353)ギリーはそうしたポーリーンを、「神経組織がそういうふうになっているんだろう。『デリケート』というふうに言われている種類かもしれん」(353)と考えている。このポーリーン像をマラマッドの母親と並べてみると、そこには明らかな相関があるのではないか。伝記によれば、マラマッドの母は夫より上品な育ちであり、内気で神経質であった。みな自分がうわさをしていると思い込んでいた。確かに精神の病を発症しているマラマッドの母と「神経衰弱」なポーリーンにはかなりの程度の差があるものの、そこにある、人生への失望感は共通しているのではないか。

興味深いことに、ポーリーンの家事能力についてギリーが語る時、明らかにマラマッドの母親の影が見えるのである。ギリーは次のように語っている：「毎年春と秋とだけはまだいいとしても、何の彼のと理由があつてトイレットをきちんと掃除してくれないこ

とがある。そうなると私がまる一日の勤務をすませてからしなければならなくなる」(354)。「彼女は家事つものにもまるで関心がない—飽きて来たんだろう。集中してやり通そうと思っている時でさえ、途中で投げ出してしまう」(354)。こうした家事全般への関心の欠如と、季節による変動は、神経の病を連想させるものである。マラマッドの母の家事能力の欠如については、すでにディビスの伝記中に、異常な清潔への執着をのぞくと家事能力を失っていく母親の姿が描かれている。マラマッドの母は、他人を嫌って店の裏の寝室に閉じこもり、鍵をかけ、家事全般に対する能力が徐々に悪化していったことが述べられている。こうしてみると、マラマッドの母親のイメージがポーリーンの人格設定に影響していると考えるのが妥当であると言えるだろう。

マラマッドが時間に几帳面であったように、レヴィンもまた、時間と秩序を重んじる人間である。ギリーは次のようにレヴィンを見ている。

君が秩序や時間をずいぶん気にかける人なのを私は知っている。しかし彼女と結婚したら、時計なんぞ、その利用価値なんか問題にしないで、永遠に埋めちまうことだ。彼女は時間に抵抗するだけじゃなくて、時間を敵視するたちだ(354)。

前述したように、この時間と秩序の問題は、マラマッドにとって正気を保つ上で絶対に必要な問題であったと推察される。母が時間を守れない人間だったこと、弟ユージーンも母と同じ統合失調症であったことは、常に彼自身の狂気への不安の原因となっていたこ

とは間違いないだろう。

では、ポーリーンの神経的弱点と、養子二人という責任を引き受けて、大学を追放されてでていくレヴィンの姿は何を示唆しているのか。そこには、おそらく「責任」が大きく関与しているだろう。西部で何者かになることに失敗し、言い換えれば、何者かになることは西部でしかなしえないことではないと考え、妻と養子という「責任」を負っていくレヴィンに、東部へ残してきた老父と統合失調症の弟ユージーンへの「責任」とを重ねるのは見当違いではないだろう。しばしばマラマッド作品にあらわれる「責任」が、意外な個人的具体性をはらんでいたことを、ディビスの伝記は伝えている。それを考えると、ギリーが、なぜ養子まで連れていくのか、という問いに対して「それはぼくにそれができるからですよ」(360)というレヴィンの答えに込めたマラマッドの思いを想像することができるのではないか。

こうして『新しい生活』を読み返してみると、そこに描かれる第二の機会の希求と責任は、アメリカ文学固有の伝統に帰するだけでなく、マラマッド自身の人生のきわめて個人的な要素と深く関わっていると考えられる。この小説が、マラマッドの人生を支配した喪失と傷を彼の芸術へと変容させた作品であると考えることが妥当ではないか。そして、マラマッドの諸作品に共通する、第二の機会の意味も、より明らかに理解されるのではないか。そして、「伝記素」を作品解釈に取り込むことで、作品の意味をより明確にすることができるということを裏付けるものとして、ディビスの仕事は、今後のマラマッドの作品研究の上で大きな意味があると思われる。

参考文献

- バルト, ロラン. (1979): 物語の構造分析. 花輪光訳. みすず書房. (Barthes, Roland. *Introduction a L'analyse Structurale Des Recits*. Paris: Editions Seuil, 1961-1971)
- (1979): 彼自身によるロラン・バルト. 佐藤信夫訳. みすず書房. (——— *Roland Barthes*. Paris: Editions du Weuil, 1975.)
- (1985): 明るい部屋—写真についての覚書. 花輪光訳. みすず書房. (*La Chambre Clare: Note sur la photographie*, Paris: Gallimard, 1980.)
- Davis, Philip. (2007): *Bernard Malamud: A Writer's Life*, London: Oxford University Press.
- Hawthorne, Nathaniel. (1850, 1906): *The Scarlet Letter*. New York: E.R. Dutton.
- Malamud, Bernard. (1961): *A New Life*. New York: Farrar Straus Giroux.
- (1979): *Dubin's Lives*. New York: Farrar Straus Giroux.
- Moddelmog, Debra A. (1999): *Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*. New York. Cornell University Press.
- Stern, Daniel. (1975): "The Art of Fiction: Bernard Malamud" *Paris Review*, no. 61 (Spring): 40-64.

Wilson, Rob.(1991) "Producing American Selves: the form of American Biography," In *Contesting the Subject: Essays in the Postmodern Theory and Practice of Biography and Biographical Criticism*, edited by William H. Epstein. West Lafayette: Purdue University Press: 167-91.

Witherington, Paul. (1975): "Malamud's Allusive Design in *A New Life*." *Western American Literature* vol.10. 1975 :115-23.